

目的に応じて引用する力を育てる国語科学習指導の工夫

— 情報を評価しながら読む活動を通して —

呉市立白岳小学校 中舩 智子

研究の要約

本研究は、目的に応じて引用する力を育てる国語科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、目的に応じて引用する力を、必要な情報を得る、情報を活用して自分の課題を解決するという児童自身が明確に意識した目的に応じて、引用すべき一節や文、語句を選び、適切に引用する力とした。この力を育てるために、読んだ情報が目的に応じているか評価する規準や基準をまとめた「ものさし」を使って情報を評価しながら読む活動を行った。具体的には、課題発見・読む目的の設定、「ものさし」の設定、「ものさし」を活用した評価読み、「ものさし」を活用した引用すべき一節や文、語句の選択、引用すべき一節や文、語句を使った記述の五つの過程で、情報を評価しながら読む活動を行なった。その結果、目的に応じて引用する力が高まった。このことから情報を評価しながら読む活動は、目的に応じて引用する力を育てることに有効であることが分かった。

キーワード：目的 引用 情報を評価する「ものさし」

I 研究題目設定の理由

小学校学習指導要領（平成20年）国語の第3学年及び第4学年「C読むこと」の自分の考えの形成及び交流に関する指導事項に「エ 目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。」¹⁾と示されている。

平成26年度全国学力・学習状況調査（以下「全国学力」とする。）小学校国語の文章を引用して自分の考えを述べる設問（B¹三）の正答率は、28.4%であった。また、平成27年度「全国学力」の引用を含む文章を読んで引用箇所を見付ける設問（A⁵二）も20.0%と低い正答率であった。引用する力は継続的な課題である。平成26年度「全国学力」の誤答を見ると、引用する目的を理解できずに引用すべき一節や文、語句を見付けられていないもの、「」を使うなどの引用の仕方を理解していないものが多かった。引用する力を育てるためには、中学年段階で、引用する目的意識を十分もたせる指導や引用すべき一節や文、語句を選ばせる指導、引用の仕方を理解させる指導の充実が求められる。

そこで、本研究では、第4学年の説明的文章を読むことの学習指導において、記述された情報が目的に応じた情報かを評価する規準や基準を一枚にまとめた「ものさし」を使って情報を評価しながら読む

活動を単元に取り入れる。具体的には「課題を発見し、読む目的を設定する段階」「『ものさし』を児童自身が設定する段階」「『ものさし』を活用して情報を評価しながら読む段階」「『ものさし』を活用して引用すべき一節や文、語句を選ぶ段階」「引用すべき一節や文、語句を使って書く段階」を設定する。

このように、引用する目的意識を十分もたせた上で情報を評価しながら読ませて、引用すべき一節や文、語句を選ばせることで目的に応じて引用する力が育つと考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 目的に応じて引用する力とは

(1) 目的に応じるとは

小学校学習指導要領解説国語編（平成20年、以下「小学校解説」とする。）では目的について「『目的に応じて』ることは、話すこと・聞くこと、書くことと同様に、読むことにおいても重要である。読むことによって何をしようとするのか、またどのように活用しようとするのかなどについて考える必要がある。」²⁾と示されている。水戸部修治（平成24年）は、「読む能力を確実に育成するためには、子どもの目的意識や考えとは無関係に読み方を教え込むの

ではなく、なぜその本やその文章を読むのか、どのように読めば自分の課題解決につながっていくのかを自覚できるよう、低学年から発達の段階に応じて指導していく必要がある。」³⁾と述べている。

以上のことから、本研究における「目的に応じる」を「必要な情報を得る、情報を活用して自分の課題を解決するという、児童自身が明確に意識した目的に応じる」と設定する。

(2) 引用する力とは

「小学校解説」では、「『引用』とは、本や文章の一節や文、語句などを引いてくることである。かぎ（「」）でくくることなど、引用の仕方を指導するとともに、引用したことについて、引用者が自分の思いや考えを書くことなども指導する必要がある。」「なお、実際に引用や要約をするに当たっては、文章の表現や情報だけに限らず、図表やグラフ、絵や写真なども含むことに留意し、引用する部分をかぎ（「」）でくくり、出典を明示することや、引用部分が適切な量になることなどについても指導することが求められる。このことは、著作権を尊重し保護することになる。」⁴⁾と示されている。

佐渡島紗織（2014）は、大学生が文章作成において引用に関わる基礎的・基本的な知識・技能が身に付いていないことを指摘し、「具体的には、引用・参考文献明記に関わる指導を、小・中・高校・大学で一貫して行なう必要があることを提案する。」⁵⁾と述べている。これらのことから、中学年は引用の入門期として引用の仕方について丁寧な指導を行うことが求められていると考える。

また、「小学校解説」には「引用する場合は、まず何のために引用するのかという目的を明確にする必要がある。」⁶⁾「『目的や必要』には、自分の考えや感想などを高めたり、調べたことを報告したり、紹介したりすることなどが考えられる。」⁷⁾と示されている。平成27年度全国学力・学習状況調査報告書（平成27年、以下「報告書」とする。）小学校国語では、自分の考えの根拠として説得力をもたせる、具体例を挙げて読み手を納得させることの重要性が指摘されている⁽¹⁾。これらのことから児童に引用の効果を理解させた上で、目的に応じて引用させる指導が重要であると考ええる。

さらに、「報告書」には、目的によって、どの文献のどこをどの程度引用するかが決まってくると述べられている⁽²⁾。目的によって、引用する箇所が変わってくることから目的によって引用すべき一節や文、語句を選ぶ指導も重要であると考ええる。

これらのことから、「引用する力」とは、「引用の仕方を正確に理解し、適切に使える力」と「引用する目的意識を十分もって引用すべき一節や文、語句を選び、用いる力」を合わせた力とする。

(3) 目的に応じて引用する力とは

本研究では、（１）（２）を踏まえ、「目的に応じて引用する力」を「必要な情報を得る、情報を活用して自分の課題を解決するという、児童自身が明確に意識した目的に応じて、引用すべき一節や文、語句を選び、適切に引用する力」とする。

2 情報を評価しながら読む活動について

(1) 情報を評価しながら読むとは

本研究は、情報を評価しながら読む活動を手立てとして、「目的に応じて引用する力」を育てる。1の(3)で述べた「引用すべき一節や文、語句」とは、自分の課題を解決するために必要な情報のうち、自分の考えの根拠や具体例となって、自分の考えを高めてくれる一節や文、語句であると考ええる。「引用すべき一節や文、語句」を選ぶには与えられた情報を闇雲に使うのではなく、情報を評価しながら読むことが必要である。情報を評価しながら読むことに関連性のある記述は「小学校解説」と中学校学習指導要領解説国語編（平成20年、以下「中学校解説」とする。）にも示されている。「評価」という文言は「中学校解説」第3学年で初めて示され、「小学校解説」では示されていない。しかし、「小学校解説」の説明的な文章の解釈に関する指導事項では、文章の解釈について「文章の内容や構造を理解したり、その文章の特徴を把握したり、書き手の意図を推論したりしながら、読み手は自分の目的や意図に応じて考えをまとめたり深めたりしていくことである。」⁸⁾と述べられている。中学校では、文章の構成や展開、表現の仕方などを評価しながら読み、自分の考えをまとめる指導が示されている⁽³⁾。

また、情報を評価しながら読む活動を授業の中核に位置付ける研究は、これまでも多くの研究者や実践者によって提唱され、実践されてきている。

先行研究の中から、情報を評価しながら読むことに関連性のある記述をまとめたものを表1に示す。

森田信義（2010）の「評価読み」、吉川芳則（2015）の「クリティカルな読み」、井上尚美（1998）の「批判的な読み」はそれぞれ、児童が文章をそのまま無批判に読むのではなく、目的に応じて主体的に読んでいくことを目指している。そのような読みの過程で、児童は文章について「筆者の考えを述べるのに

ふさわしいものか」「論の展開，説明の仕方は分かりやすいか」と内容や形式について一定の基準をもって評価し，自分なりの考えをもつことにつなげている。

表 1 先行研究における情報を評価しながら読むことに関連性のある記述（下線と※は稿者による）

森田信義 ⁹⁾ (2010)	「評価読み」とは、読みの対象である文章・作品の内容・形式（説明的文章に限っては、それに「論理」を加えているが）を、その構造を尊重しながらも、優れているものは優れていると判断して受け容れ、問題があるもの、誤っているものは、疑問や意見、改善という反応の対象として、保留したり、拒否したりする読みを指す。
吉川芳則 ¹⁰⁾ (2015)	とりわけ書き手（筆者）が、ある情報を伝えるために論理的に筋道を立てて述べている説明的文章を読む場合には、書かれている事柄や書き表し方、筆者の見方や考え方に対しての是非を検討し、自分の考えを主張することが必要となる。
井上尚美 ¹¹⁾ (1998)	情報の真偽性・妥当性・適合性を一定の基準にもとづいて判断し評価できるようにすること ※真偽性 情報の中味がホントかウソか ※妥当性 考えの筋道が正しいか正しくないか ※適合性 情報はどの程度確かであるか、また現実と照らし合わせて適当であるか

本研究では、まず、児童自身に、文章そのものが引用元として使える、筆者の考えの筋道や内容が適切な文章か、共感できる文章か評価させる。そして引用に値すると評価した文章から情報を取り出し、「自分の課題を解決するために必要な情報のうち、自分の考えの根拠や具体例となって、自分の考えを高めてくれる一節や文、語句であるか」評価させ、自分の考えをまとめるための一節や文、語句として引用させる。このような適切な引用を行わせるために、二段階の評価読みを設定する。

一段階目の評価読みは、文章全体の適切さを評価する段階である。この評価読みで、児童は筆者の考えの筋道が適切かあるいは現実と対応しているかなどを判断した上で、筆者の考えを理解し、自分が共感できるかできないかを明らかにする。適切かあるいは現実と対応しているかなどの基準で問題のある文章と判断した文章からは、筆者の考えの筋道の批判を行う場合以外は引用することができない。適切であった場合は、筆者の考えに共感、反対のどちらかの立場から、引用する一節や文、語句を選ぶことができる。この一段階目の評価読みは、文章そのものが引用に値するものかどうかを評価するもので、評価の観点は3氏の評価読みそのものである。ただし、筆者の考えの筋道が適切かあるいは現実と対応しているかという判断は、小学校という発達段階などによっては難しい場合がある。

二段階目の評価読みは、一段階目の評価読みで適切な文章であった場合に、書かれている情報を先に示した基準で、目的に応じているか細かく評価し、引用すべき一節や文、語句を選ぶ段階である。3氏の評価読みのうち、内容についての評価読みを目的を意識させて行わせるものである。

この二段階の評価読みを合わせて「情報を評価しながら読む」とする。図1に示す「情報ぴったりのさし」とは、文章に記述された情報が、目的に応じた必要な情報かを評価する規準や基準を一枚にまとめたワークシートである。そして、特に「情報ぴったりのさし」を活用して二段階目の評価読みの充実を図る。このように二段階の「情報を評価しながら読む」活動を単元に取り入れることで、「目的に応じて引用する力」を育てることとする。

Figure 1 is a worksheet titled "情報ぴったりのさし" (Information Just Right). It is designed to help students evaluate and select information based on their purpose. The worksheet is divided into three main sections: A, B, and C.

Section A: 課題を発見し、読む目的を設定する。 (Discover the topic and set the purpose for reading.) This section includes a scale from 1 to 5 for matching information to a purpose. The scale is labeled "情報ぴったりのさし" and "目的 ○○に～について伝える。". The scale points are: 1 (なんともあてはまる), 2 (あてはまる), 3 (あてはまる), 4 (あてはまる), 5 (とてもあてはまる). Below the scale, there are five boxes labeled "引用すべき" (Should be cited) and "一節や文、語句" (A paragraph or sentence, or words). A note on the right says "きじゆん 内容だ。○○によく分かる" (Citation: Content. It is very clear from the ○○).

Section B: 「ものさし」を児童自身が設定する。 (Students themselves set the 'Information Just Right' scale.) This section includes a scale from 1 to 5 for matching information to a purpose. The scale is labeled "情報ぴったりのさし" and "目的 ○○に～について伝える。". The scale points are: 1 (なんともあてはまる), 2 (あてはまる), 3 (あてはまる), 4 (あてはまる), 5 (とてもあてはまる). Below the scale, there are five boxes labeled "引用すべき" (Should be cited) and "一節や文、語句" (A paragraph or sentence, or words). A note on the right says "きじゆん 2 その文について自分の体験や考えを書ける" (Citation: 2 I can write about my own experience or thoughts about that sentence).

Section C: 文、語句を選ぶ。 (Select a paragraph or sentence to cite.) This section includes a table for recording evaluations and scores. The table is titled "情報ぴったりのさし まとめ表" (Information Just Right Summary Table). It has columns for "情報" (Information) and "評価" (Evaluation). The rows are labeled "きじゆん" (Citation) and "点数の合計" (Total score). The table is used to record the scores for each piece of information and to calculate the total score. A note at the bottom says "目的に応じてぴったりの情報をつか二つ選ぼう。" (Choose two pieces of information that match the purpose.)

図 1 「情報ぴったりのさし」のワークシート（モデル）

(2) 情報を評価しながら読む活動を取り入れた単元の展開

本研究では、説明的文章において情報を評価しながら読む活動を取り入れた単元を、「課題を発見し、読む目的を設定する段階」「『ものさし』を児童自身が設定する段階」「『ものさし』を活用して情報

を評価しながら読む段階」「『ものさし』を活用して引用すべき一節や文、語句を選ぶ段階」「引用すべき一節や文、語句を使って書く段階」の五つを組み合わせ設定する。この単元構想図を図2に示す。

ア 課題を発見し、読む目的を設定する段階（一段階目の評価読み）

この段階は、文章全体の適切さを評価する段階である。まず、児童自身が課題を発見し、読む目的をもつ場面を設定する。次に、単元全体の課題となる言語活動を設定する。その上で単元のゴールのイメージを具体的に示して共有させ、学習の見通しをもたせると同時に意欲を高めさせる。そして、児童は、共通教材の文章構成や内容を確認、要約し、筆者の考えを捉え、自分が共感できるかできないか明らかにする。この活動を通して、筆者の考えの筋道あるいは現実との対応など、引用元として使える文章かどうかという視点で文章全体の適切さを評価し、引用すべき一節や文、語句を選ぶために今後、詳しく読んでいくという意欲を高めさせる。

イ 「ものさし」を児童自身が設定する段階

この段階では、まず、課題解決をするために引用が効果的であることを例文を読んで実感する活動を行う。次に、オリジナルの「引用の手引」を使って引用の目的や引用の仕方をつかませる。さらに、「情報ぴったりのものさし」の設定の仕方を、「情報ぴったりのものさし」を使って考えをまとめる例を示して説明する。「ものさし」の設定で最も困難だと予想される目的に応じて評価する規準の設定については、良い評価する規準を使って引用し、考えをまとめた例と悪い評価する規準を使って引用し、考えをまとめた例を比較させ、良い評価する規準とはどのようなものかを具体的に理解させる。そして、良い評価する規準を参考に、自分たちが前の段階で設定した目的に応じて評価する規準を児童自身に考えさせ、適切かどうか検討させた上で決定させる。

ウ 「ものさし」を活用して情報を評価しながら読む段階（二段階目の評価読み）

児童は、一段階目の評価読みで適切であると判断し、自分が共感できるかできないか明らかにした本や文章から、「情報ぴったりのものさし」の規準を基に、引用すべき一節や文、語句をいくつか探していく。それらを、付箋に書き込む。

エ 「ものさし」を活用して引用すべき一節や文、語句を選ぶ段階（二段階目の評価読み）

児童は、引用すべき一節や文、語句を「情報ぴったりのものさし」のどの程度目的に応じているかとい

う基準を基に並べ替えて点数化し、その合計点などで引用すべき一節や文、語句を選ぶ。その後、引用した一節や文、語句と、それらを選んだ理由を友だちに説明し、目的に応じて選んでいるか意見を述べ合う。

オ 引用すべき一節や文、語句を使って書く段階

児童は、引用すべき一節や文、語句を適切に用いた上で、引用の内容に関わる体験や自分の思いや考えを入れて書きまとめていく。最後に、友だちと書いたものを交流し、目的に応じた引用が行われているか、「情報ぴったりのものさし」と照らし合わせながら意見を述べ合うとともに互いの感じ方、考え方の違いを認め合う。

ア～オの段階を、第一次、第二次は共通教材を使って集団で行い、第三次は並行読書で選んだ本や文章を使って個人で行う。

本研究では、このような学習の展開によって、「目的に応じて引用する力」を育てる。

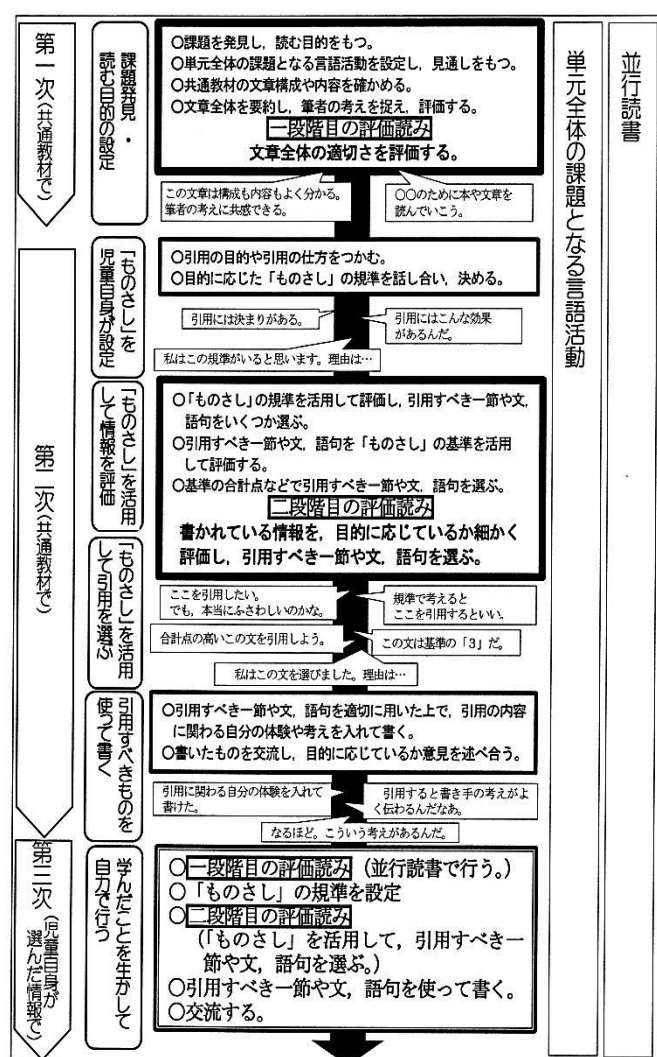


図2 情報を評価しながら読む活動を取り入れた単元構想図

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

研究の仮説及び検証の視点と方法を表2に示す。

表2 研究の仮説及び検証の視点と方法

研究の仮説	説明的な文章を読むことの指導において、情報を評価しながら読む活動を行わせることで、目的に応じて引用する力を育てることができるであろう。
検証の視点	方 法
目的に応じて引用する力が育ったか。	プレテスト ポストテスト 事前・事後アンケート ワークシート リーフレット
情報を評価しながら読む活動は、目的に応じて引用する力を育てるのに有効であったか。	

Ⅳ 研究授業について

1 研究授業の概要

- 期 間 平成27年12月4日～平成27年12月18日
- 対 象 所属校第4学年（2学級66人）
- 単元名 暮らしの中の「和」の良さをアピールしよう
- 教材文 「暮らしの中の和と洋」
（新しい国語四下 東京書籍 平成27年）
- 目 標
目的に応じて引用すべき一節や文、語句を選んで文章を読むことができる。
- 単元全体の課題となる言語活動
自分で選んだ「暮らしの中にある『和』の良さ」について、引用を使ってリーフレットにまとめて伝える言語活動

2 指導計画（全12時間）

次	時	主な学習活動	自分の選んだ「暮らしの中にある『和』の良さ」について引用を使ってリーフレットにまとめて伝える。
一	1	「和」の課題を発見し、「暮らしの中の『和』の良さを伝えるアピール文」にまとめて3年生に伝えるという学習の見通しをもつ。	
	2・3	共通教材の全文の文章構成や内容を確認する。文章全体を要約し、筆者の考えを捉え、評価する。	
	4	引用の目的や引用の仕方をつかむ。	
二	5	目的に応じた「ものさし」の規準について話し合う。	
	6	共通教材を「ものさし」を活用して評価し、引用すべき一節や文、語句を選ぶ。	
	7	引用すべき一節や文、語句を使って、「『和室』の良さを伝えるアピール文」にまとめる。	
三	8	「和」の良さを伝える「ものさし」の規準を決め、本を評価しながら読む。	
	9	「ものさし」の規準を活用して評価し、引用すべき一節や文、語句をいくつか選ぶ。	
	10	引用すべき一節や文、語句の中から「ものさし」の基準を活用して評価し、引用すべき一節や文、語句を選ぶ。	
	11	引用すべき一節や文、語句を使って「暮らしの中の『和』の良さを伝えるアピール文」にまとめる。	
	12	リーフレットを読み合い、交流する。	

Ⅴ 研究授業の結果分析と考察

1 目的に応じて引用する力が育ったか

(1) プレテスト・ポストテストの結果より

プレテストには「平成26年度『基礎・基本』定着状況調査」の「おもてなし」についての説明的文章を、ポストテストには第4学年の教科書教材である説明的文章「地下からのおくり物」（学校図書）を問題文にして、〔1〕目的に応じて、引用すべき一節や文を選ぶ問題、〔2〕目的に応じて引用すべき一節や文、語句を選び、適切に引用して自分の考えをまとめる問題を設定した。

ア 目的に応じて引用すべき一節や文を選ぶことについて

〔1〕目的に応じて引用すべき一節や文を選ぶ問題では、目的に応じて、引用すべき一節や文を選んでサイドラインを引かせた。判断基準を表3、プレテスト・ポストテストの結果を図3に示す。

表3 「目的に応じて引用すべき一節や文を選ぶこと」を検証する判断基準

段階	判断基準
A	目的に応じて引用すべき一節や文を全て選んでいる。
B	目的に応じて引用すべき一節や文をほとんど選んでいる。
C	目的に応じて引用すべき一節や文を選んでいない。

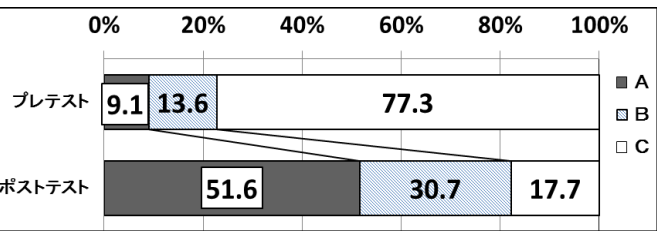


図3 「目的に応じて引用すべき一節や文を選ぶこと」についてのプレテスト・ポストテストの結果

A段階及びB段階の児童の割合はプレテストでは22.7%であった。C段階児童の誤答の状況を見ると、目的に応じて引用すべき一節や文でない誤った一節や文、又は、ほぼ文章の全体にサイドラインを引いている児童が多かった。一方、ポストテストでは、A段階及びB段階の児童の割合が82.3%と59.6ポイント向上した。特に、引用すべき一節や文を見付け、その全てにサイドラインを引いているA段階の児童の割合は51.6%とプレテストに比べて42.5ポイント増えた。以上のことから目的に応じて引用すべき一節や文を選ぶことができたと考えられる。

さらに、個の変容を分析するためにクロス集計を行った。結果を次頁表4に示す。表を見ると、11人の児童がプレテストに引き続き、ポストテストでもC段階であったことが分かる。

表4 「目的に応じて引用すべき一節や文を選ぶこと」についてのクロス集計

プレ	ポスト	A	B	C	計 (人)
A		4	2	0	6
B		5	4	0	9
C		23	13	11	47
計 (人)		32	19	11	62

ポストテストの問題は「温泉の効き目」について具体例を示して説明するという目的に応じて引用すべき一節や文を選ぶ内容であった。11人中4人が具体例の一部の文章、3人が具体例だけでなく温泉の説明や筆者の主張の文章も選んでいた。これらの児童は、プレテストでは必要な情報をほとんど選べていなかった。その実態と比べると必要な具体例を選ぶようになっていることから目的に応じて引用すべき一節や文を選ぶ力がある程度、向上したと判断できる。しかし、児童の授業での様子を見ると、授業中の引用において11人中7人が、引用の内容と自分の考えが整合していなかった。「自分の考えを高めたい」などの引用の目的意識を十分もたないまま引用し、自分の考えをまとめていることが分かる。

イ 目的に応じて引用すべき一節や文、語句を選び、適切に引用して自分の考えをまとめることについて

〔2〕目的に応じて引用すべき一節や文、語句を選び、適切に引用して自分の考えをまとめる問題の判断基準を表5、プレテスト・ポストテストの結果を図4に示す。

表5 「目的に応じて引用すべき一節や文、語句を選び、適切に引用して自分の考えをまとめること」を検証する判断基準

段階	判断基準
A	筆者の主張についての考えを述べるという目的に応じて、引用すべき一節や文、語句を選び、適切に引用して自分の考えをまとめている。
B	筆者の主張についての考えを述べるという目的に応じて、引用すべき一節や文、語句を選び、適切に引用して自分の考えをまとめているが、自分の考えに比べて引用部分が長く、考えのアピールが弱い。
C	筆者の主張についての考えを述べるという目的に応じて、一節や文、語句を選び、自分の考えをまとめているが、引用した一節や文、語句と自分の考えが整合していない。
D	目的に応じていない一節や文、語句を選び、自分の考えをまとめている。
E	一節や文、語句を選ばずに、自分の考えをまとめている。
F	無解答

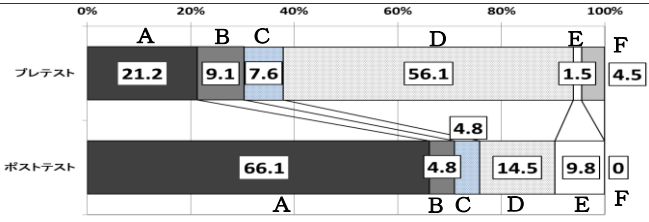


図4 「目的に応じて引用すべき一節や文、語句を選び、適切に引用して自分の考えをまとめること」についてのプレテスト・ポストテスト

プレテストで56.1%と多かったのは、図中のD段階の文章中の一節や文、語句を選んで自分の考えをまとめようとしているが、目的に応じていない一節や文、語句を選んでいる記述であった。具体的には、「おもてなしに外国の人が感動しているので、もっと感動させたいからおもてなしを大切にしていきたい。」など、筆者の主張を誤って捉え自分の考えを述べていた。その結果、目的に応じていない一節や文、語句を選んでいる。ポストテストでは、目的に応じて引用すべき一節や文を選び、適切に引用して自分の考えをまとめることができた児童の割合は、判断基準Bの準正答を含めると30.3%から70.9%に向上した。目的に応じていない一節や文、語句を選んでいる記述は、56.1%から14.5%に減少した。

(2) 事前・事後アンケート結果より

図5及び図6は「説明文を読んで自分の考えをまとめるとき使いたい言葉や文を考えながら説明文を読むか」「説明文を読んで自分の考えをまとめるとき『この言葉や文を使うと相手によく伝わる。』など文章中の言葉や文を選んで使っているか」という質問項目について、児童の意識の変容を示している。

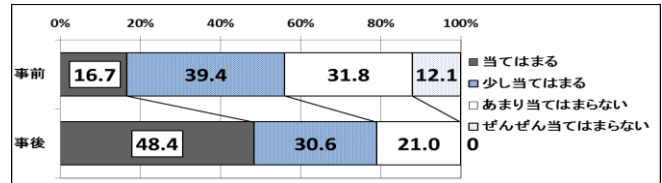


図5 「自分の考えをまとめるとき使いたい言葉や文を考えながら説明文を読む」ことにおける児童の意識

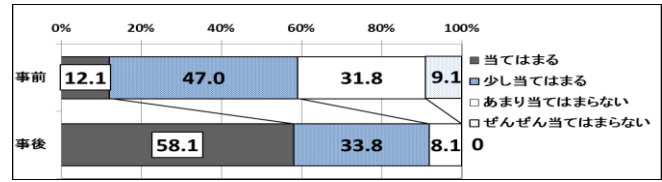


図6 「自分の考えをまとめるとき『この言葉や文を使うと相手によく伝わる。』など文章中の言葉や文を選んで使う」ことにおける児童の意識

自分の考えを述べるために適切な一節や文、語句を選んだり使ったりしているという意識が向上していることが見取れる。

(1) (2) から、目的に応じて引用する意識が高まり、引用する力も付いたといえる。

2 情報を評価しながら読む活動は、目的に応じて引用する力を育てるのに有効であったか

(1) 児童の記述による分析

プレテスト・ポストテストの〔2〕目的に応じて引用すべき一節や文を選び、適切に引用して自分の考えをまとめることにおいてD段階からA段階に向上した2名の児童の記述を例に示す。授業では、目的に応じて引用すべき一節や文、語句を選んで適切に引用する学習を、第二次では共通教材を使って集団で、第三次では並行読書の本を使って自力で行った。表6は、これらの学習を通して目的に応じて引用する力が向上した児童aの第三次のアピール文の記述である。

表6 児童aの文章の記述

たたみの良いところをしょうかいします。たたみの良いところは室内にやすらぎをもたらすそんざいであるということです。例えば、「日本のくらしの知恵事典」という本には、「たたみには、ほどよいクッション性があり、すわったり横になったりしてもいたくありません。」と説明されています。ぼくは、茶道で、正ぎをして長くすわっても、あまりいたくありませんでした。3年生のみなさん、たたみにきょうみをもってください。いたくありませんよ。

児童aは、プレテストにおいて、文章中の語句をいくつか選んで断片的に自分の表現に取り込んでいて、自分の考えとつなげることはできていなかった。

授業の中で、児童aは、3年生に和の良さを伝えるという目的を設定した。3年生への事前調査で、畳に座るのは痛い気がするので和室が嫌だと感じているという3年生の実態に気づき、自分が茶道で正座を長い時間しても大丈夫だという体験を基に畳の良さを伝えようと考えた。記述では、「ぼくは、茶道で、正ぎをして長くすわっても、あまりいたくありませんでした。」という自分の体験から考えた畳の良さを補説するために、畳の良さの具体として畳の特徴のクッション性と、その特徴によって長く座っても痛くないという事実について記述された文を選んで引用している。

児童aが並行読書から文章にまとめるために活用した「情報ぴったりのさし」の記述を図7に示す。

児童aは「情報ぴったりのさし」の規準を「3年生に和の良さが伝わる。」「その文について自分の体験や考えが書けそうだ。」に決め、二段階目の評価読みでは規準に基づいて時間をかけて評価していた。内容が異なる四つの引用すべき一節や文を選んで付箋に書いた後、「情報ぴったりのさし」の規準を活用して細かく評価し、規準の合計点が高い

一文を選んだ。

情報	情報①	情報②	情報③	情報④	情報⑤
きじゆん	5	4	2	1	
3年生に和の良さが伝わる。	5	3	1	2	
その文について自分の体験や考えが書けそう。	10	7	3	3	

あてはまるなどの基準(5段階)の合計点を基に、情報⑤を選んだ。

図7 児童aの「情報ぴったりのさし」の記述(一部)

その後、適切に引用して自分の考えをまとめている。「情報ぴったりのさし」を活用して選んだ効果で、目的を意識した一文を選ぶことができ、自分の体験を大事にした文章にまとめることができています。

次に、同じくプレテストがD段階で、ポストテストでA段階に向上した児童bの記述を図8に示す。図8は並行読書で読んだ本の内容で引用できそうな一節や文、語句をメモしたワークシート「本のメモ」である。児童bはプレテストでは、目的に応じていない一節や文、語句を選んでいった。

情報	情報①	情報②
「和食」和食というのは日本の気候・風土・歴史の中ではぐくまれてきた料理のことです。	5	4
「七五三」子供の成長を感謝し将来の無事を祈って神社に参りする行事	5	3
「ひなまつり」女の子の幸せとすこやかな成長を願い、ひな人形を飾る	10	7

あてはまるなどの基準(5段階)の合計点を基に、情報⑤を選んだ。

図8 児童bの「本のメモ」ワークシートの記述

児童bは、3年生に和の良さを伝えるという目的を設定した。そして、「本のメモ」(図8)に、並

行読書した本から八つの情報を選んでいった。「本のメモ」を見ると、並行読書した本から様々なジャンルの和の良さを思いつくまま取り出し、羅列的にメモしている。児童bは、第二次で「情報ぴったりものさし」を活用して、評価しながら読んでいく過程で、自分の「本のメモ」の情報が羅列的であることに気付いた。第三次では、その気付きを踏まえ、「情報ぴったりものさし」を活用して細かく評価し、八つの情報から引用すべき文の一つを選び、自分の経験を入れてまとめることができた。

児童bは、情報を評価する段階の振り返りで「目的に応じて引用する文を決めるのはとても迷ったけど、きじゅんをもとにしたら決めることができました。」「『情報ぴったりものさし』は表のようにまとめてあって分かりやすいです。」「『情報ぴったりものさし』は、引用するときにこれからも使えそうです。」と記述している。自分の考えをまとめることに苦手意識をもっていた児童bが、「情報ぴったりものさし」を活用して情報を評価しながら読んだり、引用すべき文を選んだりすることで、自分の考えをまとめることへの抵抗が減り、目的に応じて引用して文章にまとめられたことに達成感を感じていた。

以上のことから、情報を評価しながら読む活動は目的に応じて引用する意識と力を育てるのに有効であったといえる。

(2) 事後アンケートによる分析

事後アンケートの「本が前より読めるようになったと思う。」という問いに対して、96.7%の児童が肯定的回答をしている。その理由に「3年生に『和』を好きになってもらいたいと考えながら読むとたくさん本が読めるようになりました。」「本に書いてあるところで大切な言葉が見つけれられるようになった。」などの記述が見られた。情報を評価しながら読む活動は、児童に読む目的を明確にもたせることで本や文章を「もっと読みたい。」という意欲を高めるとともに、どのように本や文章を読んだらいいのかという読み方の指針も与える活動だといえる。

また、目的に応じて引用するときに、「情報ぴったりものさし」を活用して情報を評価しながら読む活動は役に立ったかという問いに対しては、全ての児童が肯定的回答をしている。

以上のことから、情報を評価しながら読む活動は目的に応じて引用する意識と力を育てるのに有効であったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

情報を評価しながら読む活動は、目的に応じて引用する力を育てるのに有効であった。

2 今後の課題

- 自分の考えを高めるなど引用する目的意識を十分もたせる指導の工夫の研究を進めていく。
- 情報を評価しながら読む活動は、全学年において実施することができると考える。今後、小学校や中学校での情報を評価しながら読む活動の系統性を明らかにし、他学年での単元づくりを行う。

【注】

- (1) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成27年）：『平成27年度全国学力・学習状況調査報告書小学校国語』p. 40に詳しい。
- (2) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成27年）：前掲書p. 40に詳しい。
- (3) 文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版pp. 72-74に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省（平成20年 a）：『小学校学習指導要領』東京書籍 p. 23
- 2) 文部科学省（平成20年 b）：『小学校学習指導要領解説国語編』東洋館出版 p. 62
- 3) 水戸部修治（平成24年）：「自ら学ぶ子どもを育てる、国語科における言語活動の充実の在り方」『初等教育資料 平成24年 6月号』東洋館出版 p. 11
- 4) 文部科学省（平成20年 b）：前掲書 p. 65
- 5) 佐渡島紗織（2014）：「アカデミック・ライティング教育と情報リテラシー—《情報を再定義》し意見を構築できる学生を育てる—」『情報の科学と技術 64巻1号』社団法人情報科学技術協会 p. 22
- 6) 文部科学省（平成20年 b）：前掲書 p. 83
- 7) 文部科学省（平成20年 b）：前掲書 p. 65
- 8) 文部科学省（平成20年 b）：前掲書 p. 20
- 9) 森田信義（2010）：『「評価読み」の研究（1）—読みの構造と学習指導過程—』比治山大学現代文化学部紀要 第17号 p. 133
- 10) 吉川芳則（2015）：「思考力を育てるアクティブな国語授業づくり」『教育科学国語教育No.789』明治図書 p. 38
- 11) 井上尚美（1998）：『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—』明治図書 p. 49